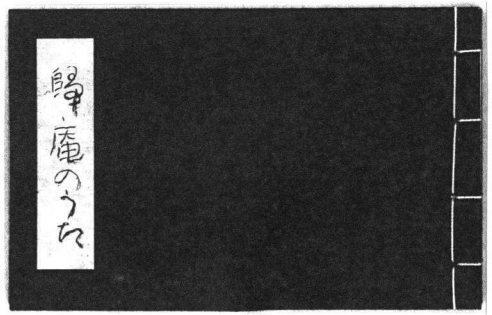
松坂歸庵（まつざかきあん）　書家、歌人。明治二十五年四月四日岡山縣英田郡美作生れ、昭和二十四年八月二十二日歿（一八九二―一九五九）。明治三十九年得度、法名旭信。大正五年眞言宗京都大學（東寺）卒業。引續き同校で宗學の研究に從ひ、教鞭を執る。在學中から書畫、短歌、篆刻、寫眞等を學び、書に至りては獨自の風を完成したと評せられた。谷崎潤一郎は岡山疎開中に「岡山は三軒目いは歸庵哉」と云はるゝ程岡山にてはその書大いに行はるゝ。予も一幅もらひて歸るゝ」と「越冬記」と題した一文に記し、會津八一も歸庵宛書翰中に「よく幽寂の趣を得て調子も靜かに落つきて風情深きことにて候ゝ、「茶碗を拜見するに貴坊はみごとなる名筆にて候ゝ」と認めたことなど、秦秀雄が「現代の良寛歸庵」（『背畫一期一会』所收・昭和五十五年九月二十九日文化出版局）で傳へてゐる。昭和五年岡山市三野の法界院住職、二十四年大僧正。

歌集『歸庵のうた』（杉鮫太郎編、昭和四十六年八月十五日岡山・星尾正一刊）。